

家をも喪うにいたるは、此ものにて候、
 祭礼・祝儀・老人・病者の養は格別
 に候えども、年若きもの決して飲過
 ずべからず、仍て今ここに添えて
 諭し置候、総て農民たるもの、この
 御書付の旨、能々心得べき事肝要
 に候、村々へ頒ち与うるには数多書

★肝要（かんよう…肝心、必要、大切）

数多（あまた…数量が多いこと、多くの、たくさん）

写すべければ、おのづから誤字・脱字も
 あらんことを恐れ、改て板に刻ませ候間、
 名主・組頭等は勿論、小前平百姓の内にも
 年長候者とも常々厚く心懸、世話
 いたし申すべく候、所によりては読物手習
 など教える者へも渡し置き、あまねく
 村民どもへ読ませ、常に能々教諭

★小前平百姓（村役人等ではない一般の百姓、小前百姓）

手習（てならい…文字を習うこと、学習すること）

せしむべきもの也

天保九戊戌歳 月

（山本大膳蔵版）